

教師の「ディスカッション教育」技能の開発と教育 支援システム作り

丸野, 俊一
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/13253>

出版情報 : 2005-05
バージョン :
権利関係 :

口頭発表・ポスター発表（題目・要約）

*国際学会での発表*****
2004年度

Maruno, S., & Kato, K. (2004). Association between "implicit rules of classroom discussions" and children's perception of how teacher and peers perceive thier question-asking. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, 2004, in Beijing, China.

本研究では、1221名の生徒（小4から高3）を対象に、(a)「教室での話し合い活動における暗黙のルール」と(b)教師や仲間が質問行動をどのように見るかとのように関連しているかを、質問紙で検討した。その結果、これら2つの要因が、小4－高3を通して、理論的に有意な方向で関係があることが示唆された。

Kato, K., & Maruno, S. (2004). Teacher's scaffolding and development of discussion behaviors in Japanese children. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, 2004, in Beijing, China.

本研究では、1221名の生徒（小4～高3）を対象に、(1)生徒の質問行動に対する教師のscaffolding行動、(2)それと生徒の議論行動の発達を検討した。その結果、教師のscaffoldingは、小学生において、子どもの議論行動（特に、思考、情動制御、議論行動・やりとりの実践技能）を促進することが示された。

Maruno, S., & Kato, K. (2004). Influences of discussion experiences with family / peers on discussion behaviors. Poster presented at the 112th Annual Convention of the American Psychological Association, Hawaii. July 28-August 1.

本研究では、小4～高3を対象に、家族・仲間との議論体験がその後の議論行動や「教室での話し合い活動における暗黙のルール」にどのような影響を持っているかを検討した。その結果、家族・仲間との議論体験の量や質が、議論行動および「議論や積極的参加へのポジティブな態度」と理論的に想定される方向で有意な相関が示された。

Kato, K., & Maruno, S. (2004). Development of "Implicit Rules of Classroom Discussions" and Discussion Behaviors. Poster presented at the 112th Annual Convention of the American Psychological Association, Hawaii. July 28-August 1.

本研究では、1221名の生徒（小4－高3）を対象に、「教室での話し合い活動における暗黙のルール（IRCD）」の発達的变化、およびそれと議論技能や態度等との関連を検討した。その結果、(1) IRCDは、小4より前に形成されている可能性がある（Table 1）、(2)IRCDの種類や程度は、議論行動・態度等に重要な連関を持っている（Table 3）が示唆された。

Tomida, E., & Maruno, S. (2004). Factors Promoting Thinking Processes in Everyday Problem Solving Discussion. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, 2004, in Beijing, China.

本研究の目的は、曖昧な構造の協同問題解決課題において、課題についての個人の考えの変化を促進する要因を探索することであった。主に「葛藤的発話や協調的発話が、参加者の考えの変化を促進する」(因果モデル①)と、「質問が説明行動を引き出し、それが参加者の考えの変化を促進する」(因果モデル②)を検討した。43名の大学生は、4-5名から成る10グループに分けられ、日本の十代の若者による衝動的な暴力が起こる原因を説明する仮説因果パスモデルを協同で作成するよう求められた。得られた書き起こしを、コーディング・スキーマ(富田・丸野, 2000)を用いてコード化・集計し、課題についての参加者の考えの変化の有無などの他の変数との関連を検討した。その結果、因果モデル②は支持されたが、因果モデル①については、協調的発話のみに思考の促進効果が見られた。発話カテゴリ間の相互関係を詳細に検討すると、質問だけでなく協調的発話も説明行動を引き出すことが分かった。

Tomida, E., & Maruno, S. (2004). Do conversational conflicts facilitate knowledge reconstruction in everyday problem solving? Paper presented at the 2nd Tokyo Conference on Argumentation, August, .

本研究の目的は、日常の文脈でおこる問題解決型議論を効果的なものにする談話過程を特定することであった。特に、参加者の意見の相違を明示的に分析する談話方略が議論を効果的にする談話過程であるという仮説について検討した。この仮説を検討するために、デュアル・コーディング・スキームという、個々の発話機能を特定するためのコーディング・カテゴリーの一覧を作成した。このスキームを用いて、2つの小グループの議論を比較した。この2つのグループの結果を比較したところ、談話方略をより多く使用したグループのほうが、他方のグループよりも議論テーマについての考え方が大きく変化していた。この結果は、我々の仮説を支持するものであった。さらに、展開方略の使用が具体的にはどのように考えの変化に結びついたのかを談話過程を詳細に分析することで明らかにした。

Zhang, L., & Maruno, S. (2004) Why and How do Chinese Lecturers Introduce Dialogical Teaching Methods into Higher Education. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, 2004, in Beijing, China.

本研究は、授業に対する教師の信念と教授行動の関連を明らかにするため、中国の大学教師を対象にし、インタビューを通して「授業の進め方」についての教師の信念を調べ、その後、実際の授業を観察し、教師の教授行動を分析した。その結果、「授業の進め方」についての教師の信念に基づいて、教師を「伝達固執群」、「迷い群」と「対話実践群」に分けた。授業観察を分析したところ、三群が使っている教授方略が違うことが明らかになった。

Tomida, E., & Maruno, S. (2004). Empirical findings and theoretical background of Argument as thinking Paper presented at the 2nd Tokyo Conference on Argumentation, August, .

近年、多くの思考研究者がアーギュメントを非形式的推論の一つのトピックとして捉えている。思考を捉える枠組としてアーギュメントが重要である主な理由は、(1) アーギュメント研究は、従来の批判的思考研究においてほとんど実証的に検討されていない、自らの考えを生成するスキルについて実証的知見を提供する、(2) 多くのアーギュメント研究がその理論的背景として持っている社会構成主義的発達論を拡張することにより、これまで体系的・実証的に提案されてなかった個人の思考スキルの獲得について、社会的プロセスを包含する統合的なモデルを提供することが可能である、ということの2点である。本研究は、思考としてのアーギュメント研究の理論的背景を探った後、アーギュメント・スキルとそれに関連した諸特性の獲得過程に関する実証的研究を展望した。その結果、明らかになった事は以下の通りである：(a) アーギュメント・スキルの最も萌芽的形態である、自己の行動や欲求を正当化するスキルは、既に3歳前後で十分に獲得されている。(b) アーギュメント・スキルを支える、「理論」と「根拠」を区別するメタ認知能力は、児童期のおわりから青年期の初めにかけて準備される。(c) 合理的アーギュメント・スキルが獲得される一般的時期に関する体系的な検討はなされていないが、既に児童期の終わりには、合理的アーギュメント・スキルを獲得する者もいる。(d) アーギュメント・スキルは青年期以降も、大きな個人差がみられる。(e) スキルの個人差を規定する変数としては学歴が取りあげられることが最も多いが、その因果関係を支持する一貫した結果は得られていない。(f) 活発な議論に継続して参加することによって、個人の生成するアーギュメントの質が高められることが確かめられている。これらの結果を踏まえ、我々は、アーギュメント・スキルをより系統的に検討するための理論的枠組として、目的・価値、基本的認知能力、修辭的形式の3領域から成る仮説的モデルを提案した。

2003 年度

Tomida, E., & Maruno, S. (2003). Gender Difference in Effects of Conflict on Cognitive Change. Poster presented at the 25th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Boston. July, 31-August, 2.

本研究は、会話上の葛藤が話し合いの前後での考えの変化にもたらす効果に、どのような男女差があるか検討した。43名の大学生参加者は、10の小グループに分けられ、グループで子どもがキレる原因を説明する因果パスモデルを話し合いながら構成するという課題を課せられた。このグループでの話し合いの前後には、参加者個人が考えている同様のモデルを構成する課題が与えられ、それを比較することで個人の考えの変化の程度が測定された。参加者の発話傾向と考えの変化の程度の間を関連を調べた結果、男性の参加者においては葛藤が考えの変化を促進する傾向が見られた一方、女性には反対に葛藤が考えの変化を抑制することが分かった。この結果について、社会言語学的見地から考察を行った。

国内学会での発表**
2004年度**

松尾剛・當眞千賀子・丸野俊一 2004 授業における対話の生成 -子どもたちの発話形態の変化を通して- 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 515.

話し合いの際に生徒が用いる「発話をつなげる表現」の種類や使用頻度に、授業の枠組みが与える影響を検討した。小学6年生1学級における国語単元の分析を通じ、独話活動という対話を重ねる構造をもった活動において、種類や使用頻度が増加することが示された。

生田淳一・丸野俊一 2004 小学校において質問が生じやすいのはどのような授業なのか-「授業(社会, 理科, 学級会)の特徴の違い」による質問生成活動の程度の違い- 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 447.

小学校において質問が生じやすい授業とはどのようなものかについて、授業構造に注目して分析した結果、質問が生じやすい授業には、「興味を惹く、珍しさのある、手ごろな挑戦が必要な課題」、「自分で考えなければならない活動」が含まれている必要があることが示唆された。

生田淳一・丸野俊一 2004 教師は対話型授業をどのように認識しているか-教科教育・道徳・特別活動における実施状況の違いと実施上の問題点- 九州心理学会第72回大会発表論文集, 43.

教師を対象にした対話型授業の実現へ向けた基礎的調査の中から、対話型授業の実施の実態と実施上の問題点について教師の認識から明らかにすることを試みた。その結果、対話型授業ができない理由として、教師は自身の教授スキルや対応力の欠如に原因を求めている事がわかった。

富田英司 2004 議論展開過程の時系列的分析 日本知能情報ファジィ学会主催 ほつと暖まる合同研究会 8月(優秀ポスター賞受賞).

自然対話場面での議論における、話題内容の時系列的变化の把握に利用可能なテキスト解析手法の一例として、キーグラフ(大澤 他, 1999)がある。これは、単語の共起頻度に基づき、単語間の関係をネットワーク図として示し、重要概念の特定と議論展開のキーワードを発見する手法である。しかし、この手法は、時系列上の分析単位の設定が難しく、任意の2点における議論内容を比較するには情報量が多すぎるため、図の解釈が難しい。そこで、議論中に連続して出現する単語の出現傾向に基づいて、時系列上の分析区分を設定する手法を考案した。加えて、この手法による分析結果が、人間の手によるものとの程度一致するか検討した。

松尾剛・丸野俊一・富田英司 2003 教養教育課程の教育目標を学生はどのように認識しているのか 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 385.

教養教育課程における多様な授業スタイルの教育目標を生徒がどう認識しているのかを調査した。質問紙調査の結果、創造的問題解決、内省的思考、基礎的な知識・技術の三つの視点から獲得すべき能力を認識していること。(2)話し合いを中心にした授業では前者の二つが目標とされ、講義中心の授業では知識・技術の獲得が目標とされていると認識していることが示された。

生田淳一・丸野俊一 2003 教師への質問行動に対する児童・学生の認識－小学生と大学生の質問行動に対する認識の質問紙調査による比較－ 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1230.

大学生と小学生の質問行動についての自己評価の比較を行った。その結果、小学生「質問が思いつかない、質問しない」、大学生「質問を思いついている、質問しない」と両者質問しない状況でありながら、その結果にはちがう背景がある可能性が示唆された。

生田淳一・丸野俊一 2003 どうすれば小学生は授業で質問することができるようになるか(2)－質問生成を中心にした対話型模擬授業セッションの質的分析－ 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 509.

児童の質問行動の変容を促すことを目的とした「質問生成を中心にした対話型模擬授業セッション」による介入実験を行った。その結果を質的に分析し、「質問することを求める」「言語化をサポートする」といった関わり方についての教育的な示唆を得た。

富田英司・丸野俊一 2003 議論における探索方略と個人の素朴な説明の変化との関わり 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 617.

本研究の目的は、日常の文脈でおこる問題解決型議論を効果的なものにする談話過程を特定することであった。特に、参加者の意見の相違を明示的に分析する談話方略が議論を効果的にする談話過程であるという仮説について検討した。この仮説を検討するために、デュアル・コーディング・スキームという、個々の発話機能を特定するためのコーディング・カテゴリーの一覧を作成した。このスキームを用いて、2つの小グループの議論を比較した。この2つのグループの結果を比較したところ、談話方略をより多く使用したグループのほうが、他方のグループよりも議論テーマについての考え方が大きく変化していた。この結果は、我々の仮説を支持するものであった。さらに、展開方略の使用が具体的にはどのように考えの変化に結びついたのかを談話過程を詳細に分析することで明らかにした。

生田淳一・丸野俊一 2002 どうすれば小学生は授業で質問することができるようになるか—質問生成を中心にした対話型模擬授業セッションによる介入の試み— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 354.

児童の質問行動の変容を促すことを目的とした介入実験を行った。その結果、生成・行動についての認識だけでなく、質問行動についての認識（「他者の理解を促進する機能」「消極的態度」「価値観」）についても変化が見られることがわかった。

生田淳一・丸野俊一・加藤和生 2002 授業での発言スタイルは小学生・中学生・高校生で異なるのか—発言スタイルの発達的变化と「議論スキルの水準」との関係の検討— 日本心理学会第66回大会発表論文集, 1114.

学齢を経るにつれて、積極的な発言スタイルをとる人が減っていくこと。また、議論スキルの水準と関連は、学齢を経るにつれ、その相関が小さくなることがわかった。このことから学齢を経るにつれ、発言スタイルには、議論スキル以外の要因が関係してくることが推察された。

奈田哲也・生田淳一・丸野俊一・加藤和生 2002 小学校教諭が認識している対話型授業が持つ利点とは—「教師主導型」、「教師—生徒対話型」、「生徒間対話型」の3授業タイプの比較を通して— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 345.

対話型の授業タイプとそうではない授業タイプのそれぞれが持つ利点についての教師の認識を比較検討した結果、教師は、「教師の利便性」に関しては、対話型ではない授業タイプに利点があるが、他の「思考・理解の深まり」などに関しては、対話型の授業タイプに利点があると認識していることが判明した。

富田英司・丸野俊一・加藤和生 2002 行動についての素朴な説明は議論を通してどのように変化するのか 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 429.

本研究は、社会的推論における個人の持つ素朴な説明が議論を通してどのように変化するかを検討した。分析の枠組としては、Malle (1999) の説明モードを用いた。説明モードには次の3種類が想定されている。(1) 理由：欲望・価値感・信念といった、心的に表象された内容による説明を指す。(2) 理由の因果履歴：行動主体に理由を引き起こした客観的な因果的背景を指し、主体の主観的気づきから独立している。(3) 実現要因：意図が必ずしも行動に結びつかない場合に、その行動を可能にする個人のスキルや状況要因を指す。研究対象は、大学生27名であり、議論のテーマは、「大人しい人が突然暴力をふるうことの原因は何か」であった。延べ45分間の議論セッションの前後に、参加者の考えるテーマについての原因を思いつく限り箇条書きさせた。議論の前後で説明を比較すると、3つの説明モードのうち、実現要因にのみ出現頻度の変化が見られた。

富田英司・丸野俊一・加藤和生 2002 個人の持つ素朴な説明モードはどの程度安定しているか 日本心理学会第66回大会発表論文集, 215.

本研究では、日常の社会的推論における個人の持つ素朴な説明がどの程度安定しているか検討した。分析の枠組としては、Malle (1999) の説明モードを用いた。説明モードには次の3種類が想定されている。(1) 理由：欲望・価値感・信念といった、心的に表象された内容による説明を指す。(2) 理由の因果履歴：行動主体に理由を引き起こした客観的な因果的背景を指し、主体の主観的気づきから独立している。(3) 実現要因：意図が必ずしも行動に結びつかない場合に、その行動を可能にする個人のスキルや状況要因を指す。大学生27名を対象に、「大人しい人が突然暴力をふるうことの原因は何か」について思いつく原因を全て箇条書きにさせた。その後1週間のインターバルを置いて同じ課題を与えた。分析の結果、インターバルの前後で説明モードが一致していた参加者は18名(67%)であった。今回の限られた参加者と分析にのみ限って言うと、説明モードは個人内である程度安定している可能性が示唆されたと言える。

堀憲一郎・丸野俊一・加藤和生 2002 授業場面に潜む“暗黙のルール”と発言スタイルとの関連 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 434.

授業中の発言スタイルと授業場面に暗黙のうちに生徒が共通して抱くルールとの関連を検討した。その結果、小学校・中学校・高校ともに授業を行う教師が求めている答えから外れているかもしれないという恐れを感じ、積極的に自分の意見や疑問を発言できないことが示唆された。

堀憲一郎・丸野俊一・加藤和生 2002 授業場面に潜む“暗黙のルール”の発達の検討 日本心理学会第66回大会発表論文集, 1137.

小学生・中学生・高校生が抱く授業場面における行為や振る舞いについての暗黙のルールについて確証的因子分析を用いて、“暗黙のルール”構造の発達の違いを検討した。その結果、小学生・中学生の段階では教師の期待に沿って積極的に授業に参加し、正解を導いていく意識があるのに対し、高校生では個人的プロセスとして正解を導くことと、授業中に他者と共に考えて答えを探索する意識は別と考えており、授業場面对する捉え方の変化が示唆された。